２０１８．７．２１

大草

読書メモ

89．梶山雄一「空入門」春秋社（1992.3）

90．梶山雄一「さとりと廻向」人文書院（1987.6）

91．平川修「仏教入門」春秋社（1992.11）

**＜「空」仏教成語辞典から＞**

　空とは、サンスクリット語の「シューニャ」の漢訳語。

空とは、ものごとが、それ自体として成り立つ不変の実体を欠いているということ。

たとえば、この世には様々なものがあるが、それらはそれを「認識するもの」があるから、はじめて存在するのである。つまり、すべてのものは相対的なもので、「認識するもの」と「認識されるもの」という関係があって成り立っているのである。だから、何かがあってもそれを認識しなかったら、それは成り立たないことになってしまう。また、その「また、その「認識するもの」もそれを「認識するもの」がなければ成り立たない。

　すなわち、この世のすべてのものは、それ自体として成り立つ根拠はなにも持っていないということで、これが「無自性」=「空」ということである。

**＜梶山雄一「空入門」から＞**

　空とは、ものがからっぽとか存在しないということではなく、ものが不変・不滅の実体あるいは本質を持たないということである。

　三宝印（諸行無常、諸法無我、涅槃寂静）・・・釈迦が真理としてさとった内容の一部。

諸行の行とは「作られたもの」を意味する。五蘊の中の行（意欲・行為）と同じ言葉だが、諸行というときは広い意味で使って「すべての作られたもの」の意になる。すべての作られたもの、すなわち有為は移り変わる、無常であるという意味である。（P30）

諸法無常とは決して言わない。法という語は、広い意味で「すべての事物」「あらゆるもの」を表す。涅槃寂静の涅槃は絶対の安らぎで永遠に存在し、作られたものでないもの、無為と考えられた。この涅槃は、無常ではありません。そして諸法という「あらゆるもの」のなかに涅槃も含まれるため、「あらゆるもの」は無常とはいえない。

無我は、「自我をもたない」ということなので、涅槃もその他のいかなるものも自我でないため、諸法無我（あらゆるものが無我である）ということができる。

（大草の独り言）

　諸行無常は、（作られた）すべてのものごとは、移ろい変化するということ。

　諸法無我は、すべてのものごとは、実体がない、すなわち空であるということ。

（従って、諸法無常とは言わない。なぜなら、涅槃は絶対の安らぎで永遠に存在するものであり、作られたものではないから。しかし、この涅槃にも実体はない。）

　諸行無常の「行」のなかに、涅槃と虚空は入らないと理解されている。すなわち、「行」とは作られたものを指すが、涅槃と虚空は作られたものでない。

（未だに空がよく理解できない、、、困った。）

竜樹の言葉：「この世の人は、二つのものに執着している。ある、ことと、ない、こととにである」という仏陀の言葉がある。空とは、「あるものでもなく、ないものでもない」を意味する。

空とは、相対性のものである。以下の例により説明する。

①距離10ｋｍ：10ｋｍは、短い？長い？短くもないが、長くもない？このように実体がないことを示している。距離がないわけでもなく、長いでも短いでもない。

　②茶碗：名作か贋作か

　③飛蚊症：飛蚊が見える。治療で治り見えなくなった。有ったでもなくなったでもない。

　④入れ物：肥壺か金魚鉢か（実体を持たない入れ物）

（大草の独り言：空とは、アインシュタインの相対性理論のようなものか。ビッグバンの前後のようなものか。物質と反物質のバランスが崩れた状態か。

　空の思想とは、転換の思想である。「八千頌(じゅ)般若経」：布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧（六波羅）の完成を智慧の完成という。多くの幸福の原因となる行為（善根）を一切智に転換させるという仕方で発展させる。

　智慧の完成、いいかえれば、空の智慧が、布施・持戒・忍辱・精進・禅定という他の五つの徳目を仏陀の一切智という出世間的なものに転換してしまうということなのです。

　世俗の善を聖なる智慧に転換し、また聖なる智慧が世間の道徳にもなる、という転換を可能にしているものが、じつは空の智慧なのです。

　転換を訳したことばは、普通「廻向」といわれる語です。廻向とは、善根の功徳をさとり、一切智に振り替えること（菩提廻向）、あるいは、自分の功徳を他人に与える、振り向けることです。前の方は、内容の転換であり、後ろの方は、方向の転換である。

　この廻向は、大乗仏教では極めて重要な役割をもつ述語であるが、このような転換は、ものが空であるからこそ可能になるのです。

　迷いの生活から抜け出る道は、どこにあるのでしょうか。あまりにも人間的な、多様な思い、判断、思惟、それに続く煩悩と行為を捨てた、空の世界に帰るほかないのです。空とは、人の概念、ことば、判断、思惟、煩悩、行為のないことにほかなりません。(P96)

　（P100　空の論理）

１．有でもなく、無でもない

２．ものは何から生じるのか。

　それ自体から生じる：原因と結果が同一である場合

　他のものから生じるか：壺は土から生じる

３．行くものは、行かない

４．眼はそれ自体を見ることはできない。

５．無限遡及と相互依存

　竜樹は二つの真理（二諦）を区別している。

①一般の理解としての真理（世俗諦）：空によって、すべてのものが仮のもので有り得る。

②最高の真実としての真理（勝義諦）：あらゆるものに実体がないということ

この区別を知らない人は、仏陀の教えの深甚の実義を知らない。この二つは別々のものではなく、一つの真理の裏表の関係にある。

（P181　倫理の根拠）

　因果応報（自業自得）は、輪廻説をとり、インド、アジアにおいて、社会の倫理に根拠を与える唯一の理論であった。一神教の世界では、道徳・倫理は神の掟・命令として成立している。唯一の神を持たないインド世界では、輪廻説こそが道徳を根拠づける唯一の理論であった。輪廻説なしには、仏教社会の倫理も成り立ちませんでした。十二縁起は、（竜樹の当時の仏教界において）輪廻と道徳を説く最も重要なそして最も合理的な教説となっていた。

**＜平川修「仏教入門」から＞**

　戒・定・慧の三学。

戒学：戒律を学ぶこと

定学：心が三昧を得て、対象に心を集中させること

慧学：法を観察し、縁起をさとること

　空は、「虚無」の意味ではないのでして、存在しているものに「空」という性質があるという意味です。～～世間は、有だけでなく、空の性質があり、そのために「有」が絶えず「壊れるものである」と言わんとするのです。～～しかし、空に執着している人には、その執着を捨てさせるために、「空もまた空である」という必要があるのです。～～すなわち、世間の存在は、有を本質としているのではなく、壊れること、空を本性としているという意味です。これは、存在は、自己同一の状態を維持できない性質を持っているという意味です。これを存在の状態から見れば、無常になりますが、存在の本性から見れば、空であるということです。

**＜梶山雄一「さとりと廻向」から＞**

空とは、あらゆるものが不変にして恒常な本性を持たないということである。もし、ものが変わらないで永続するならば、それは生ずることも、存在することも、滅することも無いはずである。なぜなら、生起・存在・消滅はいずれも変化に他ならないからである。いいかえれば、あらゆるものは、固有の実体とか本性とかを持っていない、だから、空であるということになる。

　「般若経」は、有部の構築した形而上学の殿堂を破壊し、その石や瓦の一つ一つを空に帰せしめた。「八千頌般若経」の第一章、第二章に集約される「空」は、有部の掲げる七十五の実体、五蘊、十二処、十八界、六界の範疇、四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、八正道支などの修道の体系、預流・一来・不還・阿羅漢という聖者の階位・仏陀・涅槃等の理想にいたるまで、あらゆる範疇を否定してゆく。すでに数百年におよぶ仏教の伝統が築き上げてきたものすべて、それらのいちいちを「取得」したり、そこに「心をとどめ」たり、「執着」したりしてはならないという。すべてのものは、人間的存在から涅槃にいたるまで、人々がそれらに執着しているような形では存在せず、空である、という。～～

　もし、あらゆるものに実体があるならば、他に拠らず、自主的にあり、不変不滅である実体がどうして生じてきたり、さっていったりするであろうか。他によって生じた原因・条件によってのみ存在するものに、どうして実体性があろうか。縁起したものに本体はなく、本体がないから空である。夢や幻は原因によって生じるが、それは実体として有るのでもなく、また見えている以上全く無いものでもない。そのようにあらゆるものは、有るのでも無いのでもない。夢・幻のように空である。～～

　空に執着してはならない。空とは、実はものをある特徴として認識し、執着することの否定であるからである。

⇒空に執着している人には、その執着を捨てさせるために、「空もまた空である」という必要があるのです。（平川修「仏教入門」再掲）

＜大草コメント＞

空の思想は、仏教の中心思想であるが、理解するのが大変難しい。

一方で、空を理解したとして、ではそれをどう活用するのか？単に理解しただけでは無意味である。

　形あるものはすべて空であるため、世の中にあるすべてのものごとに執着してはならない。執着すれば、それが苦痛となるためである。ものごとに執着することがなくなれば、世の中は平和になり、皆が幸せに暮らしていくことができるのではないか。これにより、世の中の不正も減るのではないだろうか。

　しかし、その一方で、ものごとへの執着をなくした人類に、未来は開かれているのであろうか。進歩や発展が望めるだろうか。すべてが空であるという価値観は、人類を破滅に導く危険性を孕んでいるのではないか。さらに研究を要する分野である。空の思想は、幸せに生きて行くための思想に止めておき、その思想で何かを実行するという性格のものではないのではないか。

以上